

新版 指導要文集

しんぱん

しどうようもんしゅう

だいにしょう

じっせん

第二章 実践

ふくうん

福運

よろこ

悦ばしきかなや、

たの

不肖の身として今度

ふしょう

み

このたび

しんでん

ぶっしゅ

植

心田に仏種をうえたる。

(009 撰時抄

せんじしやう

福運 203 ページ 11 行

ふくうん

「法華の名を受持せん者、福は量るべからず」。

033 法華經題目抄（妙の三義の事）

福運 534 ページ 13 行

えしよう

ふくちとも

むりよう

依正・福智共に「無量」なり。

なんみようほうれんげきよう

ふくち

にほう

いわゆる、南無妙法蓮華経は福智の二法なり

おんぎくでん

(095 御義口伝

ふくうん

福運

1104

ページー5行)

くら たから み たから 勝 み たから ところ たから

蔵の財よりも身の財すぐれたり、身の財より心の財

だいいち おんふみ ごらん ところ たから 積

第一なり。この御文を御覧あらんよりは、心の財をつま

たも

せ給うべし。

(210 崇峻天皇御書 (三種財宝御書)

すしゆんでんのうごしよ さんしゆざいほうごしよ

ふくうん

福運 1596 ページ 9 行

くら ざいほう み たから み たから

蔵にたくわえる財宝よりも、身の財がすぐれており、身の財よ

ところ っ たから だいいち てがみ ごらん

りも、心に積んだ財が第一なのです。この手紙を御覧になつてか

いご ところ たから っ

ら以後は、心の財を積んでいきなさい。

そ

うん

窮

へいほう

要

かほう尽

夫れ、運きわまりぬれば兵法もいらす、果報つきぬれば

しよじゅう

従

所従もしたがあず。

しじょうきんごどのごへんじ

ほけきようへいほう

こと

(220 四条金吾殿御返事 (法華経兵法の事))

ふくうん

福運 1622 ページ 9 行

ふくうん

へいほう

やく

た

およそ福運がなくなつてしまえば、どんな兵法も役に立たなくな

かほう

つ

けらい

したが

るし、果報が尽きてしまえば、家来も従わなくなるものです。

幸 あいぜん
さいわいは愛染のごとく、福 ふくは毘沙門 びしゃもんのごとくなるべし。

225 きょうおうどのごへんじ
（経王殿御返事）

ふくうん
福運 1633 ページ 2 行

しあわ
幸 あいぜんせは愛染明王 みょうおうのように、

ふくうん
福運 びしゃもんでんは毘沙門天 てんのように備わって

そな
いくこと でしよう。

ひと　じき　ほどこ　みつ　くどく　いち　いのち　継

人に食を施すに、三つの功德あり。一には命をつぎ、

に　いろ　増　さん　ちから　さず　いのち

二には色をまし、三には力を授く。命をつぐは、

にんちゆう　てんじよう　う　ちようめい　かほう　え　ほとけ　な

人中・天上に生まれては長命の果報を得、仏に成つて

ほとしんによらい　あらわ　み　こくう　ひと　ちから　さず　ゆえ

は法身如来と顕れ、その身虚空と等し。力を授くる故

にんちゆう　てんじよう　う　いとく　ひと　な　けんぞくおお

に、人中・天上に生まれては威徳の人と成つて眷属多

ほとけ　な　ほうしんによらい　あらわ　れんげ　うてな　こ

し。仏に成つては報身如来と顕れて蓮華の台に居し、

はちがつじゅうごや　つき　せいてん　い　いろ　増　ゆえ

八月十五夜の月の晴天に出でたるがごとし。色をます故

にんちゆう　てんじよう　う　さんじゆうにそう　ぐそく　たんじよう

に、人中・天上に生まれては三十二相を具足して端正

はな　ほとけ　な　おうじんによらい　あらわ

なること華のごとく、仏に成つては応身如来と顕れて

しゃかぶつ

釈迦仏のごとくなるべし。

みようみつしょうにんごしょうそく

(251 妙密上人御消息

ふくうん

福運 ページ 11 行)

1706

ひと しょくもつ ほどこ

みつ

くどく

いち

せいめい

人に食物を施すことには三つの功德があります。一には生命

に いろつや ま

さん

ちから

あた

をたもつことができます。二には色艶を増します。三には力を与え

いのち

にんげんかい

てんじようかい

う

るのです。命をたもつことによつて、人間界、天上界に生まれる

ちようじゆ かほう え ほとけ

ほっしんによらい

と、長寿の果報を得、仏となつては法身如来とあらわれて、その

み こくう ひと きようがい

ちから さず

身は虚空と等しい境涯となるのです。力を授けることでは、

にんげんかい てんじようかい う

いとく

ひと

おお

人間界、天上界に生まれると、威徳をそなえた人となつて多くの

ひと

まわ

あつ

ほとけ

ほうしんによらい

人びとがその周りに集まってくるのです。 仏となつては報身如来

あらわ

れんげ

だい

すわ

はちがつじゅうごや

まんげつ

は

てん

と顕れて蓮華の台に座り、ちようど八月十五夜の満月が晴れた天

で

すがた

いろ ま

にんげんかい

に出たような姿となるのです。 色を増すことによつて、人間界、

てんじようかい

う

さんじゅうにそう

そう

たんせい

天上界に生まれると三十二相をそなえてその相の端正なことは

はな

うつく

ほとけ

おうじんによらい

あらわ

しゃかぶつ

華のように美しく、 仏となつては応身如来と顕れて釈迦仏のよ

うになるのです。

はな ひら み つき い かなら 満 ともしび あぶら

花は開いて果となり、月は出でて必ずみち、灯は油を

差 ひかり ま そうもく あめ降 栄 ひと ぜんこん

させば光を増し、草木は雨ふればさかう。人は善根をな

かなら 栄

せば必ずさかう。

うえのどのごへんじ しょうがつみつか こと

328 上野殿御返事（正月三日の事）

ふくうん

福運 1897 ページ 13 行

はな ひら み むす つき しんげつ はじ まんげつ

花は開いて実を結び、月は新月から始まってかならず満月にと

み あぶら ひかり ま くさ き あめ ふ

満ち、ともしびは油をさせば光を増し、草や木は雨が降ればいよ

はんも ひと ぜんこん つ さか

いよ繁茂します。そのように、人は善根を積みばかならず栄えるの

です。

がっしこく 須だつちようじや もう もの しちどひん しちどちようじや

月氏国にす達長者と申せし者は、七度貧になり七度長者

そうら さいご ひん とき ばんみんな逃 失 し

となりて候いしが、最後の貧の時は、万民皆にげうせ死

終 妻 夫 ふたり そうら とき ごしよう こめ

におわりて、ただめおとこ二人にて候いし時、五升の米

いつか 糧 当 そうら とき かしよう しやりほつ

あり。五日のかつてとあて候いし時、迦葉・舍利弗・

あなん らごら しゃかぶつ ごにん しだい い たま ごしよう

阿難・羅睺羅・釈迦仏の五人、次第に入らせ給いて、五升

こめ 乞 取 たま ひ ごてんじくだいいち ちようじや

の米をこいとらせ給いき。その日より五天竺第一の長者

ぎおんしようじや 造 そうろう

となりて祇園精舎をばつくりて候ぞ。これをもつて、

万 ころろ 得 たま

よろずを心えさせ給え。

うえのどのごへんじ すだつちようじやごしよ

福運 ふくうん
1919
ページ
2
行

いま 日本にほんこく 敵 ほけきよう
今、日本国の、法華経をかたきとして、わざわいを千里の
そと 招 い 思 いま
外よりまねき出だせり。これをもつておもうに、今また
ほけきよう しん ひと 幸 ばんり そと 集
法華経を信ずる人は、さいわいを万里の外よりあつむべ
し。

(390 十字御書
むしもちごしよ

ふくうん
福運 2037 ページ 8 行

いま日本にほんこく 敵 ほけきよう
いま日本の国の人びとは法華経（御本尊）を誹謗して、災いを
せんり そと まね よ おも はんたい
千里の外から招き寄せています。このことから思うことは、反対
ごほんぞん しん ひと こうふく ばんり そと あつ
に、御本尊を信ずる人は、幸福を万里の外から集めることができる

のです。

ぶつぼう

あ

まれ

たと

どんげ

はなしべ

か

ああ、仏法に値うこと希にして、
喩えを曇華の蕊に仮

たぐ

う

ぎ

あな

ひ

た

り、類いを浮き木の穴に比せんすら、
なおもつて足らざる

われ

しゆくえんじんこう

さいわ

ものか。ここに、
我ら宿縁深厚なるによつて、
幸いにこ

きよう

あ

たてまつ

う

の経に遇い奉
ることを得。

につこうゆいかいおきぶみ

(456 日興遺誠置文

ふくうん

福運

2195

ページー
ジー6行

)